2025.4.4 第4回 防災庁設置準備アドバイザー会議

人を育み 未来を創る 防災教育

慶應義塾大学 環境情報学部　大 木　聖 子

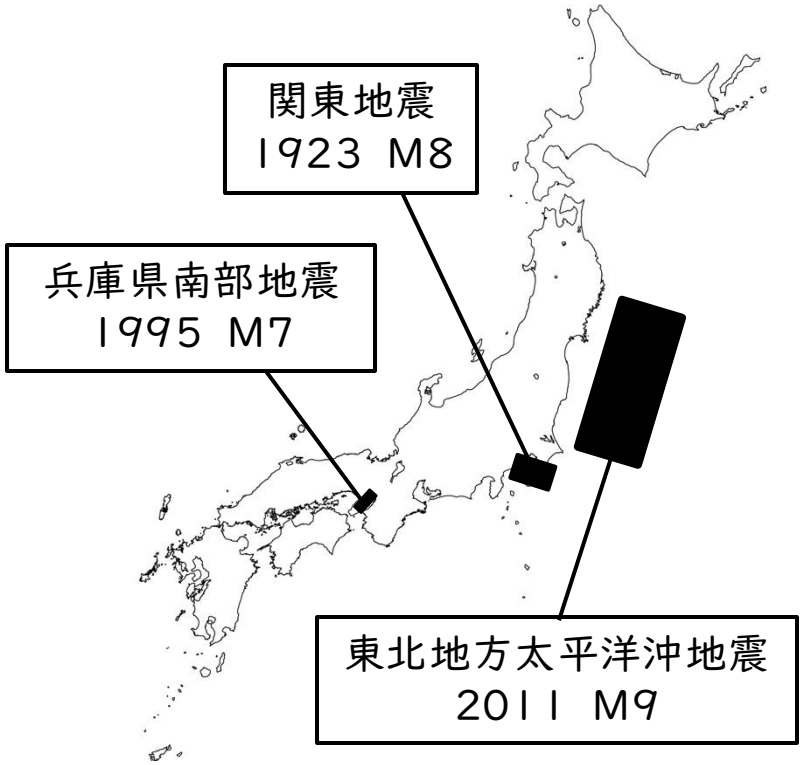
- 地域の防災訓練で学校での学びを発揮する機会の確保
  <地域防災部局の指導・監督>
- 地域防災優良事例の選出，コンテンツ化・教材化
- 管轄省庁に依らない，保育職員への防災学習機会の担保
- 防災を切り口にした平時からの横串連携の推進・監督

地震学（地球物理学）の視点から

地震規模（M）と断層面積の関係

地震とは断層面での破壊運動

破壊範囲が広い → マグニチュードが大きい



Mと揺れの継続時間の関係

立っていられないような揺れの継続時間で，およそのマグニチュードが分かる

- 10-15秒 → M7
- 1分前後 → M8（津波注意）
- 3分前後 → M9（巨大津波）

※ 例外もあるのであくまで目安

※ 立っていられるくらいの揺れ（停電しない程度の揺れ）の場合はこの限りではない

地震学（地球物理学）の視点から

- 震源位置・深さ・Mでおよその被害状況は分かる
  - 震源位置・深さ・Mは1分程度で気象庁から発表される
  - 自分が被災地にいる場合は, 揺れの継続時間から判断できる
- 初動のスイッチ
  - 震源位置・深さ・Mで瞬時に判断
  - 発災時刻から日の入までの時間で情報収集の優先順位を決定
  - 「情報が出てこない」という重大な情報を加味して判断
- 地震災害はローカル災害
  - 他地域への輸送が実現できれば救える命がある

  → 道路とその周辺建物の耐震化・車両と運転士の確保・帰宅困難者の抑制が必要
  - 「猛暑×都市圏M7地震」の輸送計画については検討不足

これまでの議論（課題系）

食事

避難先の生活空間

衛生環境

福祉の継続

他自治体への避難で支援が断絶

etc..

発災時に自治体で担いきれない

自治体にはない支援項目がある

これまでの議論（提案系）

民間の力を活かす

- **あらゆる業種・企業・組織が「発災時にできること」を考え，実行する**
  - 医療→DMAT，建築→被災建築物応急危険度判定士，報道→アナウンサーの呼びかけ
  - 炊き出し→自衛隊???，避難所運営→学校教員???

支援する側の整備・育成

- 「ボランティア」という言葉の解像度を上げ，有効に活用
- ボランティアできる人材の育成
- ボランティアのための機動的な住宅提供

大規模災害時の国としての役割・姿勢

- NIMS（国家インシデント管理システム）の整備

そもそもの犠牲者・傷病者を減らす

そもそもの犠牲者・傷病者を減らす

1. 犠牲になる要因の解消・対策 （地震そのものは人を殺さない）

強震動	耐震化（耐震化のための経済支援）・家具固定 教育
津波	高台移転・高台避難 教育
火災	難燃化・初期消火 教育
関連死	（これまでの各委員のご発表通り）

2. 発災時に困らないように教育しておく

- **小中学校** ← だいぶ整備されてきた （①訓練改善，②「防災小説」）
- **幼児** ← 支援が必要，支援があれば効果は絶大 （③幼保防災）
- 社会人 ← （帰宅困難者になるな!）

3. 健康に生きる

テーマ① 小中学校での防災教育：実効的避難訓練

- 消防法・学校保健安全法によって訓練は必ず時間確保されている
  - カリキュラム（指導要領）の変更や校種によらず，学校では必ず実施する項目
  - ただし地域格差がある：東京→年11回，西日本（一部地域）→年1回
  - 一部私立の防災教育は無法地帯状態

- 内心ではおかしいと思いながら，改善できずに訓練が形骸化

- 過去に高確率で起きていること：
  - 余震（科学的には100%起きる）
  - 停電・校内放送の停止
  - けが人・体調不良者の発生

訓練では起きないことになっている

- 過去に一度も起きていないこと：
  - 耐震化された学校校舎の倒壊

起きることにしている

テーマ① 小中学校での防災教育：実効的避難訓練

- 余震あり・停電あり（放送設備使用不可）・傷病者あり，の訓練
- けが人設定は安全担当教員と各クラスの学級委員しか知らない

先生！
けが人がいます！

けが人に
声がけを継続

けが人報告
カードを記入

ヘルメットを組み
立てて渡す

重症者を
担架搬送

うまくやるための訓練ではなく，全員が生き抜くためには
どうしたらいいかを，教職員と生徒が協力して探究するための訓練

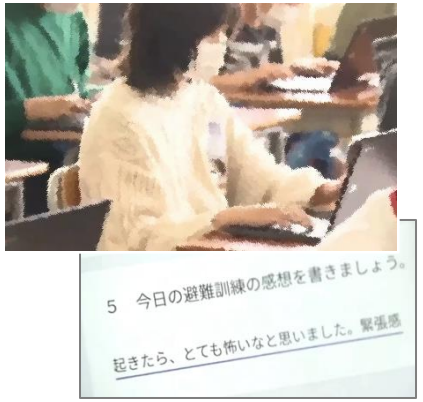
※ 主体的・対話的で深い学び（H30～ 新指導要領）

テーマ① 小中学校での防災教育：実効的避難訓練

訓練（児童は教室内待機） → 校長先生のお話 → 訓練の振り返り

お友達どうしで
小さな声で
声をかけ続けられ
ましたか？

「だいじょうぶ？」
「がんばろうね」と
声がけをしましょう



実効的な避難訓練がもたらしたもの

- 「いま自分は何をすべきか」「周りの人は大丈夫か」を絶えず考え続け，行動できる人の育成
- 声がけの多い学級（＝助け合うクラス）の形成，平時の学級運営への良い影響

よい防災は日常をゆたかにする

テーマ② 中学校から地域へ：「防災小説」交流会

- 「防災小説」とは
  - 未来の特定の日時に大地震が発生したと想定し，自分を主人公にした物語を一人称で綴る教材．結末は必ず希望をもたせるのがルール．

- 高知県土佐清水市立清水中学校での事例：
  - 11月3日 16:30 文化祭の帰り道に南海地震が発生

文化祭の出し物として
自分の「防災小説」を朗読

「ワシが死んだら死者1名になってしまう…」

今日も半島線のバスに乗った．今日あった文化祭で疲れていたのか，自分を含めた全員が寝ている．自分たちが家に帰れると安心していたその時，誰もが予想していなかった緊急地震速報の音が鳴った！

（中略）

そうして一晩を過ごした翌日，僕らはここより人が多く，ここより環境がよい避難場所，清水中学校に行くことにした．大浜トンネルの地盤はだいぶ弱くなっていて，昨日の地震の揺れの影響で土砂崩れが起き，入り口がふさがれていたので，すこし遠回りになるが中浜を歩くことにした．

（中略）

全員無事に清水中学校に来ることができた．怪我をした人を医療スペースに連れて行ったり，高齢者の方を専用のスペースに連れて行っているうちにラジオがかかった．そのラジオの内容は，昨日起こった南海トラフでの土佐清水での，行方不明者数0人，死者数0人，ということを伝えるラジオだった．

テーマ② 中学校から地域へ：「防災小説」交流会

- 全国「防災小説」交流会
  - 「防災小説」に取り組んでいる全国の中学校をオンラインで結び，学校代表作品を朗読し合う．
  - 朗読の前には生徒たちが作った学校と地域を紹介する動画（3分間）を流す．（地域の恵みにも気づくため）

そして，心が暗く沈んでしまった人に寄りそうこと．地震が起きた時，友達の「だいじょうぶ」という言葉のあたたかさに触れた私なら，きっとできると思う．自分ができることを，全力でやる．

私が学校で防災の授業を受けていたのは何のためか．自分を守れるように．周りの人を助けられるように．そのためだ．大丈夫になれるように訓練を，準備を，してきたのだから．今，私は動ける．なら少しでも周りを助けるべきだ．

「防災小説」がもたらしたもの

- 自分の地域で何が起きるかを主体的に学ぶ
- 自分や大切な人が被災する現実を真剣に考える
- 希望を持った結末になるために何をすべきか考え，行動する
- 他者（家族や地域住民）が，その物語を生きようと行動変容する
- 防災学習を振り返り，知識や技能を社会に活かそうとする

防災教育を活かす受け皿が社会の側にもっとあることが望ましい

※ 社会に開かれた教育課程（H30～ 新指導要領）

テーマ③ 未就学児の防災はマルチ世代に効果

■ **保育現場は防災教育のポテンシャルが高い**

① 平時から,「命を守る」ことが重要な職務項目

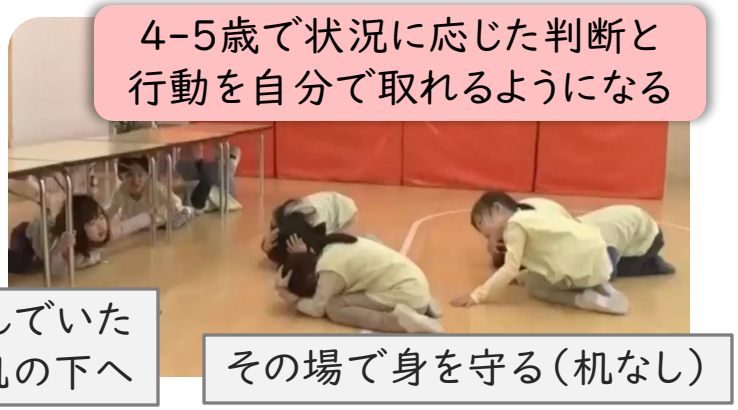
② 現場裁量のある保育指針・ゆとりあるカリキュラム

③ 幼児教育は防災教育と親和性が高い
（「学力」よりは「生きる力を育むこと」に注力）

④ 保護者の関心・参画がある（**「速やかにお迎えに」文言の改訂 → 帰宅難民抑止効果**）

⑤ 祖父母世代の行動変容を促せる（孫が幼い → まだ超高齢ではない → 自ら備えられる）

⑥ 幼児の学習能力・適応能力・共助能力が高い



未就学児の防災を阻むもの ➡ 管轄省庁の縦割り（文科省・厚労省・内閣府・こども家庭庁）

防災庁に求める役割・機能

ここまではできた

- 主体的に訓練に取り組み，仲間と協力して，諦めずにやり抜く力の涵養
- 大切な人を守るため･自分自身を活かすため，家族や地域に働きかける必要性の理解

これが必要

- ■ 地域の防災訓練で学びを発揮する機会の確保 ＜地域防災部局の指導・監督＞
- ■ 優良事例の選出，コンテンツ化・教材化

ここまではできた

- 幼児への防災コンテンツの作成
- 保育職員への訓練コンテンツの開発

これが必要

- ■ 管轄省庁によらない，保育職員への防災学習機会の担保
- ■ 弱い存在がいるからこそレジリエントな集団となる横串連携の推進・監督

例）保健課×防災課：ハローベビー訪問で家具固定